
山梨大学教育学部附属教育実践総合センター

センターだより第187号(通巻第254号)

2020年9月30日 発行
山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター
TEL 055-220-8325, FAX 055-220-8790
E-mail:jissen@ml.yamanashi.ac.jp
URL: <https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/>

※このセンターだよりで紹介した研究会、研修、教育フォーラムに関するお知らせは、改変しない限り、自由に複写、配布していただいて結構です。

■「子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会」が富士東部地区と峡中地区 で開催されました

今年度、6月に予定していた峡東地区と峡南地区での研修会は、それぞれ11月12日、11月26日に延期となりましたが、8月の研修会は予定通り実施しました。

8月6日(木)の富士東部地区では、若手からベテランまで北都留や南都留地区を中心とした教員18名(内訳:小学校10名,中学校4名,特別支援学校4名)が参加し、充実した研修会を行うことができました。山梨大学からも8名の教員が参加しました。

8月7日(金)の中北地区では、義務教育課や教育事務所の指導主事も参加し、計29名(内訳:小学校8名,中学校8名,高校2名,特別支援学校2名,行政9名)を対象に研修会を行い、山梨大学からも6名の教員が参加しました。

いずれも三密を避けるため参加者の人数を絞っての実施となりましたが、内容の濃い有意義な研修会となりました。

まず初めに、一昨年度まで山梨大学の理事・副学長であった堀哲夫先生から、OPPA論の概要説明がありました。堀先生は、OPPAの開発者であり、全国的にOPPAの普及に尽力されてきました。子どもの変容に対する意識を知るためにOPPシートが重要な役割を果たす事などを、わかりやすく説明していただきました。正に評価の本質は何かを考えさせられるお話でした。

続いて、法政大学理工学部兼任講師、武蔵野市立第五中学校非常勤講師であります辻本昭彦先生からは、まず、ダイヤモンドランキングを使って、評価について一人一人が考える活動がありました。続いてコロナ禍における学校の取組について、先生が勤務している武蔵野市立第五中学校の事例をお



話いただきました。

最後に、OPPシートの実践や授業の様子を、動画を通して、わかりやすく、また、楽しく学ぶことができました。

研修会後に参加者にお願したアンケートでは、この研修会を通して評価や授業に対する考え方が変わったという感想が多く寄せられました。以下はその一部を紹介します。



●参加者からの感想

- 教師が子供たちのことをよく知り支援していくことが大切だと思っていたが、子供達自身が自分のことを知り、これからどうしていくかということ子供たち自身で考えることが重要であることに気づいた。(教職経験3年目の先生より)
- 子供が何を考えているのかを本当に拾い上げてはいなかった。ほとんど一方的に見て褒めて終わりになっていた。双方向での実践で一人一人を見とり、指導していくことが必要だと思った。(教職経験1年目の先生より)
- 受講前は教師の目線で子供を見ていましたが、受講後は子供の内発的な動機が形となって可視化されることで、それが原動力となり思考、資質、学力等の成長を促していくことがわかりました。(教職経験26年目の先生より)
- 生徒を成長させるためには、教師が成長し続けなければならないと思いました。そのための方法としてOPPAが有効だと感じました。(教職経験12年目の先生より)
- 考えるという一方通行の授業では学びにならないということに気づいた。学習者が自分で考え、言葉にできるような授業をつくっていくことが大切だと感じた。(教職経験15年目の先生より)
- 私自身の考えが前向きになりました。私は子供たちのノートから評価をしていたが、一枚に書いていけば、最小限で見取ることができる事に気づきました。(教職経験21年目の先生より)
- 30代40代では感じられなかったことが今回ありました。若い世代の先生方に今日の内容を伝えていくことが自分の責務であると痛感しました。内容の濃い3時間でした。(教職経験33年目の先生より)

■第97回国立大学教育実践研究関連センター協議会総会報告

9月11日(金)に、第97回国立大学教育実践研究関連センター協議会総会がZoomによるオンライン会議で行われました。全国の教員育成関連のセンター所属の26大学から48名が参加し、本学からは教育実践研究部門情報教育研究領域の成田准教授が参加しました。

総会の前半では、国立大学教育実践研究関連センター協議会会長の加藤直樹教授(岐阜大学)の開会の挨拶から始まり、2019年度の第96回センター協議会総会における承認事項の確認、2020年度会長をはじめとする役員・幹事・事務局等の確認の後、2019年度会計収支報告書及び監査、2020年度予算書の審議・承認、協議会会議開催等に関する細則の改訂案の承認等の議事が行われました。また、センター協議会加盟センター間の情報交換、情報共有のためのCerd Webサイトの運用について、東京学芸大学の加藤直樹事務局長と奈良教育大学の伊藤剛和教授から説明がありました。

総会の後半では、オンライン授業に対する5000人余りの学生から回答のあったアンケート調査の分析結果や、オンライン授業時に教育効果のあった特別な配慮の事例やノウハウ、Zoomをつかったカウンセリングの方法等について、以下の4名の先生からの報告がありました。

1. COVID-19の教育実践への影響に関する情報交換会について 鷹岡亮(山口大学)
2. ZoomとMoodleを使ったオンライン授業『教育の方法と技術』の実践 須曾野仁志(三重大学)
3. 山口大学で実施した遠隔授業アンケートの結果及び遠隔授業で苦悩する学生の心理的背景 木谷

秀勝(山口大学)

4. 共感的理解を深める WEB カウンセリング 小林正幸(東京学芸大学)

その後、各センターから教育実習等の対応、後期の大学授業方法（対面、Zoom・Teams等のオンライン）、及び学部・教職大学院・センターの現状に関して情報交換が行われました。

次回センター協議会総会は、2021年3月5日(金)10:30から、東京学芸大学で開かれる予定です。

■後期教育ボランティアガイダンスを開催しました

前期教育ボランティア活動は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止としましたが、後期から再開することとし、9月2日(水)4限に後期教育ボランティアガイダンスを開催しました。事前の参加申込者は139名(4年生17名、3年生39名、2年生37名、1年生42名、他学部4名)で、三密を避けるために会場をM-12教室とN-11教室に分けて同一内容で並行して進めました(さらに追加ガイダンスを9月7日(月)に開催)。



司会進行はいつものように教育ボランティア学生運営委員で、内容は、1) 始めの言葉、2) 学部長挨拶、3) 教育ボランティア委員長挨拶、4) 学生運営委員長の話、5) 教育ボランティア活動の概略及び活動に際しての留意事項、6) 登録事務、7) 教育ボランティア運営委員の話、8) 質疑応答、9) 終わりの言葉でした。例年であれば、受入機関の各市町教育委員会や学校等の教育ボランティア担当の先生方から3分程度の説明(プレゼンテーション)をいただくところですが、今回は感染症対策としてガイダンス時間を短縮するために各機関から教育ボランティアガイダンスシートを事前に提出してもらい、それらを印刷して綴じた「教育ボランティア活動 募集内容一覧」を会場で配付しました。また、「教育ボランティア活動に関わる者の新型コロナウイルス感染症予防に向けた行動指針」について説明し、感染症罹患リスクの低減と安心・安全の確保に努めるよう指導を行いました。

後期教育ボランティアの登録は9月9日(水)に締め切りましたが、登録希望者は106名でした。このコロナ禍の中であって小・中学校等の教育現場では子どもたちの学びと成長を保障するために工夫や改善が重ねられています。本学の教育ボランティアへの期待は大きく、教師をめざす大学生の立場や視点から教育ボランティア活動に参加し、教育現場から多くを学んでほしいと思います。



始めの言葉 (教育ボランティア学生運営委員)



中村和彦学部長 挨拶



田中勝教育ボランティア委員長 挨拶



仁科浩一客員教授による活動概要説明

■附属教育実践総合センター研究紀要「教育実践学研究」第26号原稿募集

附属教育実践総合センター研究紀要「教育実践学研究」第26号の論文原稿を、下記要領により募集いたします。多くの方々からの教育実践学研究の推進に資する論文の投稿をお待ち申し上げます。

1. 投稿申込について（申込は必ず、論文の筆頭著者が行ってください）

【申込資格】

- A) 教育学域・教育学研究科・教育学部の教員（附属学校園の教員・非常勤講師を含む）及び退職者（ただし、本学部等に在職時の研究に関する発表のみ可）
- B) 教育学域・教育学研究科・教育実践総合センターの客員教授，教育実践総合センターの研究員及び研究協力者
- C) 教育学研究科の大学院生・特別支援教育専攻科所属の学生（指導教員等の承認が必要）
- D) その他、センター研究紀要編集委員会が認めた者

【申込〆切】

令和2年10月29日（木）

【申込方法】

以下の項目について記したメールを jissen@ml.yamanashi.ac.jp宛てに送ってください。

- ・申込者の氏名と所属
- ・共著者全員の氏名と所属
- ・指導教員名（筆頭著者が大学院生の場合）
- ・論文題目
- ・論文の予定総ページ数

2. 原稿提出について

【提出〆切】

令和2年11月26日（木）〆切厳守

【提出物及び提出方法】

- ・図表・写真等を含む原稿のすべてをメールまたはCD、USBメモリー等により提出してください。
- ・図表・写真は各々、別ファイルにしてください。
- ・論文全体のレイアウトのわかるプリントアウトを1部提出してください。

【提出先】

- ・提出先メールアドレス：jissen@ml.yamanashi.ac.jp
- ・CD, USBメモリー, プリントアウトの提出：附属教育実践総合センター事務室（J424, 平日9時～16時, 電話055-220-8325）

【投稿に際してのお願い】

- ・厳格に守ってお願いいたします。
- ・申込, 及び原稿作成・投稿の際には, 附属教育実践総合センター刊行内規と執筆要項を必ずご確認ください (<https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/2306/>)
- ・原稿の体裁, 分量等について, 編集委員会より修正をお願いすることがあります。平成30年6月20日にセンター研究紀要刊行内規が改訂され, 原稿の分量に関しては, 原則として1編につき刷り上がり20頁以内とされました。また, 筆頭著者としての投稿論文は, 原則として1号につき一人1編とすることとなっています。
- ・研究紀要は, 附属図書館の機関リポジトリにて全文Web公開されます。冊子体は発行しません。また, 抜刷についても, 各自でダウンロード, 印刷が可能であることから, 今年度より当委員会での取扱いをいたしません。
- ・その他, 不明な点に関しては jissen@ml.yamanashi.ac.jpに御相談ください。

これまでのセンターだよりの一部は, <https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/2306/> で見ることができます。